

テントを作ろう！

自分たちが入れるテントを作る目的をもった子どもたちは、今までの経験を活かして素材を探し始めます。木材や段ボールなど、まだ扱い慣れていないものと出会い苦勞もします。しかし、「明日はこうしたい」と、自分たちの遊びに課題をもって、それらを乗り越えていく姿に「科学する心」の育ちを読み取ることができます。

子ども（5歳児）

堺市立みはら大地幼稚園

<自分たちが入れるテントを作ろう>

7月、5歳児は、宿泊保育に興味を向けていた。幼稚園の「森」の環境から、「キャンプ」を連想し4、5人でテント作りを始めた。「お泊りごっこ」「テント作り」という事柄が、子どもたちの好奇心を高めた。中には、テントの設計図を描く子どももいた。最初は、小さなミニチュアのようなテントを作っていたが、「これでは入れないよ」と気付いて、テントを大きくすることになった。段ボールは、テントとして立ちにくく、友達と持ち合ってガムテープで留めるが、ズレたり、留めてもうまく立たなかつたりした。うまくいかないことが見られたが「もっと硬い段ボールを選ぼう」「同じ大きさの段ボールを見付けよう」「積み木で挟もう」など、テントが立つ方法を考えていくようになった。

<段ボールは雨に勝てない！>

ある日、子どもたちは困ったことに出合った。テントを保育室の外に作ったため、段ボールが**雨に濡れ、フニャフニャになってしまった**。すっかり弱くなってしまったテントを見た子どもたちは、「**段ボールは、雨には勝てないんだ**」と言った。どうすればよいのかということ、子どもたちなりに考えを出し合い、伝え合った。

雨に負けないテントを作ろう

明日は！
次は！



<材料を工夫しよう>

テントを守るものとして、ビニールや傘を使い始めた。ポリ袋やビニールシートなども、テント作りに取り入れた。さらにもっと**丈夫な物として木材**を柱に使うグループも…。

あるグループは、テント作りの写真が載っている図鑑から知識を得て、木を組み、タフロンテープで上部をくくったが、予想外に下の部分が開いてしまい、**テントを立てることができない**。

立つようにいろいろ試してみよう

明日は！
次は！



<うまく行かない原因を考えよう>

他のグループのテントが、木材の間に木を横に渡して立てているのを見たAさんが、自分たちもやってみようとした。が、すでに木材はなくなっていた。考えを出し合い、タフロンテープを使うことになる。

Bさんたちは、木材の間に2本の木を入れて立てているグループを見て同じようにやってみたが、タフロンテープでは思うようにならなかった。「**くる場所が違うのかな？**」「**長さが違うのかな？**」。

力を合せ困ったことを乗り越えよう

明日は！
次は！



<試行錯誤して>

みんなで考えを出し合っている試してみた。そのうち、**タフロンテープは木と違い緩んでしまうこと**に気付く。Cさんが、「もっと増やそう」と言い、タフロンテープを4本に増やし、木材と木材を結んでいった。すると、**4本が引っ張り合ってテントが固定**されてきたことに気が付いた。「もうちょっとで、**動かなくなる**」と、**程よい長さを探り**、見付けることができた。

保育者は、その間、留め方を変える時に、木材を動かすなどして、子どもが、タフロンテープの張り方に着目できるように援助した。くくったタフロンテープは、友達の考えで、落ちてこないようにガムテープで固定した。



継続する子どもたちの遊びの読み取りや援助を、どのように見直していますか？子どもたちの「明日は」を支えて援助していると、遊びが発展したり、深まったりするための援助が中心になることがあります。そこで、立ち止まり一人一人の視点から遊びを見ることで、新たな援助の工夫に気付くことができます。この事例では、改めて一人一人の思いを把握するために、日々の記録を活かしています。

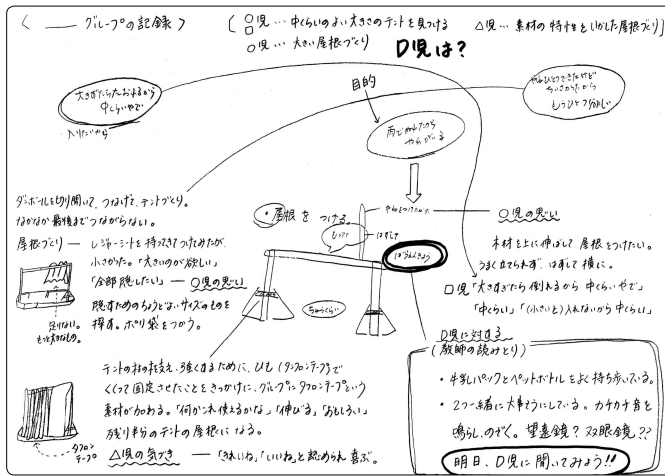
保育者（一人一人の子どもの視点から遊びの姿を見直す） 堺市立みはら大地幼稚園

子どもたちのテント作りは、それぞれ工夫しながら進んでいた。一方で保育者は、子どもの姿を十分捉えきれていなかったことに気付いた。

取り組みの中盤頃になって、友達と進める活動に入りきれていない子どもの姿が見られた。

そこで、保育者は「遊びにめあてをもっているのか」「遊び込めているのか」など、グループの進捗状況を捉えるとともに、一人一人の思いを把握し、記録することにした。

その時、作成したのが以下の記録（図：抜粋）である。



【記録から読み取ったD児の例】

Dさんは、牛乳パックとペットボトルをずっと持ち歩いてきた。思いはあるが、どう友達に伝え実現したらよいのかわからない様子を見取った保育者が、Dさんの話をよく聞き、テントをもっと工夫したい思いやイメージを受け止めた。そして「この牛乳パックとペットボトルを使って双眼鏡にし、テントに取り付けたい」ということが分かった。

保育者が仲介となったことで、Dさんの「中から外が見えるようにしたい」「より工夫したい」思いが同じグループの友達に伝わり、「いいね!」「ここに付けたらどう?」「テープでくっ付けよう」「持ってくるね」などと、アドバイスし手伝ってくれた。そして、このグループに双眼鏡ができあがった。

できあがった双眼鏡を嬉しそうに覗く友達の姿を見るDさんもとても嬉しそうであり、自分の思いが実現し満足感を得ることができた。

このように、子どもの思いと援助の方向性を明確にしたことで、一人一人の子どもの視点に立った保育者の言葉がけや働きかけとなり、子どもたちは、改めて目的意識をもって、テント作りに向かう姿へと変わった。

【テント作りの事例を園で大切にしている「科学する心」を育む4つのキーワードで考察する】

好奇心・「おもしろそうだな」「友達とお泊りごっこや、自分たちが入れるテント作りをしてみたい」「新しい材料との出会い」「雨に強い素材を見付ける」

試行錯誤・「取り扱いの難しい大きな段ボールや木材」「雨」という困難にも負けずに、様々な材料の特性に気付き選ぶ。それを活かそうとする。テントがしっかり立つように何度も試す、失敗を乗り越えてやり遂げる。

伝え合い・「丈夫なテント」を作ることを目指し、互いの思いや考えを出し合うことが、新しい考えを生み出すきっかけとなった。

満足感・工夫したり、困難を乗り越えたりしながら、自分たちのテントを作り上げた。自分の考えや工夫が実現し、遊びに活かされた喜び。